〈戦争への道〉分科会

東京・中　一夫

〈戦争への道〉分科会は，大会２日目の午前のコマを使い，中の以下の２つの資料発表を行いました。

①中一夫「捕鯨の歴史と日本――開国・明治維新・太平洋戦争，そして戦後」（40 ペ）

②中一夫「二・二六事件で襲われた人々――その生と死のドラマ」（52 ペ）

いずれも，『日本の戦争を終わらせた人々』（仮説社）の続編にあたる本をまとめる中でできた資料です。2 本の資料を読むだけでも時間は足りなくなり，最後はかなり端折った発表となりました。眺めのよい 9 階のロビーで，25 名ほどの参加者のみなさんは熱心に聞いてくださいました。

開戦の謎を探っている仕事は，現在「二・二六事件」をまとめているところです。その中の一つ，「二・二六事件で襲われた人々」の資料は，その事件で殺された「斎藤実内大臣・高橋是清大蔵大臣・渡辺錠太郎陸軍教育総監」や，生き残った「鈴木貫太郎侍従長・岡田啓介首相」らの人物を追ったものです。「天皇の側で悪事を働いている張本人たち」として襲われた人たちが，どれだけ広い視野を持ち，世界を見据えながら日本の将来を考えていた人たちであったかを伝えるものです。このクーデター事件で日本はかけがえのない人材を失い，そして破滅的な戦争へと進んでいくのです。そして，

この物語にはさらに続きがあります。

この二・二六事件で生き残った二人，「鈴木貫太郎」と「岡田啓介」が，その戦争を終結へと導いたのです。鈴木貫太郎は終戦を決定する内閣の総理大臣として，岡田啓介はその鈴木内閣を成立させ，終戦工作を後押しした元老として，日本を破滅から救うのです。

そう，この資料は『日本の戦争を終わらせた人々』（仮説社）の本の補足でもあるのです。日本の戦争は決して「終わった」のではなく，このような命がけの努力をした人たちによって「終わらせた」ものであることを，あらためて思うのです。そして，このような人たちを「悪の元凶」と信じ込んで殺していった青年将校たちは，同時に「それが日本のためになる」と信じていました。決して悪意で戦争になるわけではなく，「これが国のため」と思う予想が外れることによって，戦争に近づいて行く，その流れを思います。それは「どのようにすれば戦争になっていくのか？」という法則を探る作業であるとも思うのです。

もう一本の「捕鯨」についての資料は，戦争から脱線した話のように見えますが，逆に私が戦争を調べている中で，「捕鯨」の話題が出てきて，それに引き込まれる形でまとめた資料です。

《あかりと文明》の授業書作成者である阿部徳昭さんも紹介してくれていますが，日本を開国に導いた大きな要因はアメリカなどの「捕鯨船」の存在でした。捕鯨船の補給基地を求めてアメリカはペリー提督を派遣し，日本の開国を求めます。そして，日本を開国させたあと，ハリス公使の手により貿易についての協定：修交通商条約が結ばれます。

また，物語は捕鯨船に救助された一人の若者「ジョン・万次郎」にもつながります。万次郎はアメリカで教育を受けた後，正式な捕

鯨船の乗組員として世界を旅し，鯨を追います。そののち，彼は捕鯨船を下りて別な職業につくのですが，それは何だったでしょう？万次郎は砂金を採りにカリフォルニアの奥地に入るのです。メリカの捕鯨業が衰退していった大きな原因ともなった一つは，〈カリフォルニアのゴールドラッシュ〉だったのです。万次郎は，砂金採りをわずか一ヶ月続けただけで日本への帰国資金をためることができます。捕鯨船から多くの乗組員が砂金採りに走った理由，ゴールドラッシュの勢いが見えてくるようです。

鎖国中の日本に帰った万次郎は，長崎の奉行所で長期間取調べを受けたりしますが，一年後に故郷の土佐に戻ることができたのです。そのすぐあと，彼はペリーの来航などにあわせて江戸に呼ばれ，幕府の旗本として召し抱えられ「中浜万次郎」を名乗るようになります。

彼の冒険は庶民の間でも大評判となり，たくさんの物語本が出版され，「万次郎ブーム」が起こります。そして，それが明治維新の主人公となる若者たちの心をとらえていくのです。

そのように，捕鯨業は日本の開国につながり，日本は大きな変革の時代へと突入していきます。西洋文明を全面的に模倣する日本は，日清・日露の戦争を経て，世界の大国へと成長していきます。そして，急速に伸びていく日本はさまざまな国々との摩擦が高まり，ついには太平洋戦争での敗戦となります。

一体，日本の「戦争への道」はいつから始まったのでしょう？　何が原因と言えるのでしょう？　難しい問題をあせらず丁寧に作業を進めていきたいと思います。今回も参加者のみなさんにそういう元気を与えてもらいました。